

## 〈物語〉テキストの〈Now〉

—〈読み行爲〉の理論にむけて—

荒木正純

\*

George Eliot の *The Mill on the Floss* に 1 の文がある。この中に現象する〈now〉はいかなる読みを期待する記号であろうか。

1 She was floating in smooth water *now* — for on the over-flooded fields. (Italics mine)

一般にわれわれは言葉の意味作用が判然としない場合、辞書に赴く。英語はそれを〈consult a dictionary〉と表現する。〈consult〉は、〈権威者・資格のある人などに助言・情報などを求める〉という意味作用を起すために、〈a dictionary〉は〈Dictionary〉と聖別化される傾向にある。しかし、これが本来の用法ではないことは語源が明している。ラテン語〈*consultāre*〉は〈*con-*〉(共に) + 〈*sedere*〉(座る) + 〈*-t-*〉(反復を示す語尾) + 〈*-āre*〉(不定詞語尾) から成り、〈共に座して議する〉と意味作用した。とすれば、〈consult a dictionary〉とは、辞書と共に座して議することの反復になろう。決して神託を与える〈Authority〉という〈神〉と、それを拝受する〈人間〉という関係が、われわれと辞書に成立するわけではない。あるいは、〈辞書〉と 1 の〈テキスト〉との関係はそうである。その関係とはまさに〈テキスト相関性〉(*intertextualité*) と呼ぶのにふさわしい。たとえば OED, POD とテキスト 1 とに〈テキスト相関性〉を設定してみる。これは〈text〉と〈con-text〉の関係ではないだろう。〈context〉は語源を〈*contexere*〉とする。つまり〈*con-*〉(together) + 〈*texere*〉(weave, join), 〈共に編れてあるもの〉。しかし、〈*intertextualité*〉の〈*inter*〉(between) が強調されれば、むしろ〈共にないもの〉を予想させる。〈共にない〉(text) の〈間〉(inter) を〈埋める〉(inter) こと、〈埋め〉られた関係を〈テ

キスト相関性)は意味する。〈context〉に静的要素を読めば、〈intertextualité〉には動的要素が読める。

G. エリオットのテキスト1と OED のテキスト 1-1, POD のテキスト 1-2 にテキスト相関性をつけたということは、エリオットが OED ないし POD を参照し引喩化 (allusion) している、あるいは引用 (citation) しているということでは毛頭ない。〈引喩化〉〈引用〉といえば、当時の文芸制度のエクリチュールを対象に据えるべきであろう。実に〈テキスト相関性〉とはテキストの〈読み〉を決定する際に行なわれる作業の一つであり、われわれは辞書以外のテキストに対しても同様に行なう。

1-1 At this time; at the time spoken or referred to. 1548 UDALL, etc. *Erasm. Par. Acts* 58 For his mother, beeing now a widow, was a Iewe borne. 1592 SHAKS. *Ven. & Ad.* 349 Now was she just before him as he sat.

1-2 (in narrative) then, next, by that time, (*Caesar now marched east*)

1-1 のテキストは辞書自身が行なったテキスト相関性の〈読み行為〉、その成果のテキスト化である。〈now〉を結節点 (convergence) として数個のテキストに相関性が求められているのである。〈SHAKS. *Ven & Ad.*〉が〈UDALL, etc. *Erasm. Par. Acts*〉を〈引用〉している、〈引喩化〉しているということではできない。まさに、差異の認められたテキストが、〈now〉の一点で連鎖させられている。つまり〈now〉は〈At this time; at the time spoken or referred to〉と読める、あるいは読んだとして連鎖されているのである。これは〈intertextualité〉の〈読み行為〉に他ならない。こういうわけで 1, 1-1, 1-2 の関連を〈テキスト相関性〉と呼ぶのである。

1-1, 1-2 の二つのテキストに興味深いことがある。1 の〈now〉を読む場合、1-1, 1-2 とともに 1 とテキスト相関性をつけることができると思われるのであるが、述べている内容が同一ではない。POD によれば〈then〉は〈at that time〉であるから、1-1 の〈At this time〉と矛盾しているのである。更に 1-2 では〈in narrative〉としてテキスト相関性の可能な領域を限定しているのに対して、1-1 はなんらその限定を明記しない。OED と POD という辞書の空間的観点からしても、事情は逆であって当然と思えるのである。また、テキスト 1-2 の読み方は (narrative のテキストにある now は then と読め) としうるが、仮にそうであるとして、何故〈narrative〉のテキストが〈then〉でなく〈now〉

を選択するかの問題が残る。〈then〉ではなく〈now〉が選択されたことの記号性はそれでは説明できないと思える。

1の〈now〉を〈then〉に読み換えると、確かに統語論的パラダイムの〈過去時制〉(past tense)と馴染みやすい。だが、1-1はこの場合〈at this timeと読み〉と指示しているのだから一見〈past tense〉と馴染まない。〈past〉の記号は〈過ぎ去る〉→〈遠くへ行く〉→〈近くにない〉の連鎖を想起させる。PODは〈beyond in time or place〉と〈past〉を読むが、〈beyond〉はOEで〈begeondan〉(over there)であったので上記の連鎖が肯定される。そのため〈past〉は〈this〉と馴染まないように思える。OEDが〈now〉を〈at the presentと読み〉と教示していないのは賢明である。そうすれば〈present〉が〈past〉と露骨に矛盾するからである。

いずれにせよ、われわれの読み方はPODよりはOEDに近い。が、決してその読みに一致するわけではない。本論はG. エリオットのテキストの一部を具体的に読みつつ、〈now〉の第三の読みを提唱しようとするものである。そしてこの過程は同時に〈書記文芸〉テキストの〈読み行為〉の論理の一部を提示することになろう。

\* \* \*

テキスト1-2の読みの前提に〈narrativeの tenseは過去形〉という命題があると思える。1-1の用例のテキストは過去形の動詞を示している。PODは〈narrative〉に〈spoken or written recital of connected events in order〉という定義を与えている。〈recital〉の動詞形〈recite〉、その語源は〈recit-(āre)〉(re-again+citare cite)。このように〈recite〉の前提には、〈既に存在するもの、その不在性のゆえに再び呼び出し、存在せしめる〉ことがあろう。となれば当然〈connected events〉は〈past〉のことであり、その〈events〉を〈past tense〉(過ぎし *tempus* 〈時〉)によって指示するのは当然というわけである。

しかし、この前提が崩れるとしたらどうか。〈narrativeの tenseは present tense〉という命題が可能であるとしたら。1-2の読みは崩れていくことになる。テキスト2はテキスト1同様 *The Mill on the Floss* のものである。テキスト1は全テキストの終りに近く、テキスト2は初めに近い所に位置づけられている。

2 And now there is the thunder of the huge covered wagon coming home with sacks of grain. (Italics mine)

〈now〉と〈present tense〉の共時的存在。ここで〈now〉を1-2に従い〈then〉と読み換えることができるか。〈now と present tense とが共存する場では now は now と読む〉〈now と past tense とが共存する場では then と読む〉というのでは読みの論理が複雑になるだけでなく一貫性に欠ける。かくして〈物語の時制は過去時制〉という命題は崩れ、それと同時にそれを前提とした1-2の読みも崩れる。と言え反論が起ろう。

—〈テキスト2は narrative の制度のものではない〉。〈narrative〉の制度的意味が POD の指定する通りのものであるとすれば当然その制度的時制は〈過去時制〉であるべきで〈現在時制〉ではありえず、テキスト2は〈narrative〉の制度には属さない。この反論が一つある。これに対して〈書記物語〉(written narrative) の制度は〈小説〉を受け入れ、〈小説〉の制度は *The Mill on the Floss* のテキストを受け入れ、この全体のテキストの内部にテキスト2が存在しているのである、こう答えればよい。つまり、もし〈narrative〉が POD の定義通りであるとしても、テキスト2を認可することで、〈現在時制〉を含めた理解が迫られているのである。

—〈テキスト2は I-narrator の言表であり、物語はその部分を除く全てである〉。この反論に対してはいわゆる〈一人称〉の語りの物語を挙げればよい。物語の制度はすでにこの語りをも認可しているのである。

—〈テキスト2の現在形は歴史的現在 (historical presence) であり、本当は過去形〉。テキスト2の〈context〉は〈I〉の夢の経過を辿っており、過去と読むことはできず、〈夢〉であるために〈歴史的〉と呼ぶわけにはいかない。つまり〈歴史的現在〉とは〈過去の出来事を生き生きと描写するために用いる現在時制〉というのが制度的了解である。〈過去〉といえテキスト3が存在するので、その内容は〈I〉にとって〈過去〉のことには相違ない。しかし〈夢〉のテキスト2は最初から〈過去〉の出来事として提示されているのではなく、刻々と変化する〈夢〉こそ描写の対象であると考えるのが妥当と思われる。従ってわれわれは、歴史的現在とする反論も拒絶する。

3 Ah, my arms are really benumbed. I have been pressing my elbows on the arms of my chair and dreaming that I was standing on the bridge in front of Dorlcote Mill, as it looked one February afternoon many years ago.

またこのテキスト全体が〈factual〉でなく〈fictional〉であるので、〈historical〉

の語はなじまない。

テキスト3以前の〈夢〉の内容のテキストは注目に値する。いわゆる〈物語〉の〈読み行為〉の論理を明示的に示しているからである。つまり、〈書記文芸テキスト〉を〈過去〉の記録として読むことの拒否。〈過去〉の出来事の〈recital〉としてのテキストと読むことの拒絶。テキストから読みうる事柄を過去のこととして〈異化〉してしまうのではなく、逆に〈現前〉させる読みを要請しているのである。また、この〈夢〉であることを教えるテキスト3は〈過去の事実〉として読み進んできた読者の〈期待〉を裏切り、その読みの限界を教える。つまり、これ以後のテキストは〈虚構〉として読むよう指示していると考えられる。

4 Before I dozed off I was going to tell you what Mr. and Mrs. Tulliver were talking about as they sat by the bright fire in the left-hand parlour on that very afternoon I have been dreaming of.

テキスト4はテキスト3に続くものであるが、妙な点が見受けられる。夢を見る前に〈I〉は〈you〉に話しをしようとしていた。それは Tulliver 夫妻の話し合いについて。その日は過去 (one February afternoon many years ago) である。その日のことが夢の内容であった。つまり、Tulliver 夫妻の話し合いは〈事実〉(historical fact) に相違なく、これまでの〈夢〉は〈事実〉ではない。そう読めるのであるが、〈夢〉の内容は第II章以降のテキストに連鎖しているのである。たとえばテキスト5は〈夢〉の事柄、テキスト6は第II章の事柄で〈事実〉とされる。

5 That little girl is watching it (the unresting wheel) too; she has been standing on just the same spot at the edge of the water ever since I paused on the bridge... It is time the little playfellow (that little girl) went in, I think;...

6 '... Maggie, Maggie,' continued the mother (Mrs. Tulliver), in a tone of half-coaxing fretfulness, as this small mistake of nature entered the room, 'where's the use o' my telling you to keep away from the water? You'll tumble in and be drowned someday, an' then you'll be sorry you didn't do as mother told you.'

テキスト6では Maggie が外に居たことが想定されている。母親に呼ばれ家の内に入ってきた。この読みが5:6の合成であるとするれば、〈夢〉と〈現実〉が

交錯していることになる。この交錯は 5:6 の例を見るまでもなく、7:8 の連鎖に読める。

7 It is time, too, for me to leave off resting my arms on the cold stone of this bridge ...

8 Ah, my arms are really benumbed.

7→8 の連鎖は腕がしびれたのは腕を (the cold stone of this bridge) に押しつけていたからであると〈期待〉させる。しかし、テキスト 9 がこの〈期待〉を裏切ってしまうのである。

9 I have been pressing my elbows on the arms of my chair and dreaming ...

テキスト 8 で〈夢〉と〈現実〉が交錯しているのである。テキスト 9 を視点に据えれば、〈夢〉が〈現実〉に浸透してきたと言える。この状態こそ〈虚構〉(fiction) なのであって、テキスト 7-8-9 は〈黄昏〉のこの状態を維持して以降のテキストを読めと指示しているかのようである。この〈夢〉と〈現実〉の錯綜の状態はおそらく *The Mill on the Floss* 全体の状況でもあろう。この作品は G. エリオットの自伝的要素(事実)を含むと一般に読まれている。だが、Maggie は幼い頃のエリオットだとしても、Maggie は死にエリオットは生きて〈過去〉を描く。とすれば〈過去〉を現前化するテキストと、〈過去〉に不在であった事を現前化するテキストが混淆していることになる。

この〈過去〉の〈現前〉化の読み行為の論理でテキスト 2 の〈now〉はテキスト 1-1 の〈at this time〉と読んでよい。そしてこの時〈this〉を〈present〉としても不都合はない。テキスト 2 の時制は〈present〉だからである。かくして〈now〉は時制に関係なく〈at this time〉〈at the present〉と読むことになった。

しかし、この読みも今一つしっくりとこないのである。テキスト 1 の〈now〉はどちらも〈at the present〉とは読みにくいのである。それは〈past〉に含まれる〈that〉の意味作用、〈now〉の〈this〉との不整合に起因すると思われる。この不整合は〈now〉と〈tense〉を同一レベルで意味作用させるからである。はたして両者を同一レベルで扱うべきか。〈tense〉の語源〈tempus〉は〈時〉の意味作用をするから〈時〉が指示されるのも当然である。しかし、この〈時〉と〈now〉の示す〈時〉とは同一なのであろうか。〈時〉の概念の多様性は周知

のことで、キリスト教的直線的時間、円環的時間などがあり、〈時〉のイメージとしても〈流れ〉〈序列〉〈ロウソクの燃焼〉〈糸車〉など多様である。英語〈tense〉は基本的には Past→Present→Future の三分法で、直線的イメージ、川の流れのイメージでとらえられる。ところが、〈now〉は〈then〉と対立し、その対立ではじめて有意味となる二分法の〈時〉を表わし、〈流れ〉ではなく、〈time〉の語源 OE の *tima* に基づくと思える。〈*tima*〉は〈*tid*〉つまり〈*tide*〉のことであり、〈干潮／満潮〉の二分法で把握される〈時〉のイメージをもつ。この〈潮〉(*tide*)のイメージが *The Mill on the Floss* の最初のテキストに現われるのは偶然なのであろうか。

10 A wide plain, where the broadening Floss hurries on between its green banks to the sea, and the loving *tide*, rushing to meet it, checks its passage with an impetuous embrace. (*Italics mine*)

ここには〈the Floss〉が示す〈流れ〉のイメージと、〈*tide*〉のイメージとの関係性が示されている。〈*tide*〉が〈the Floss〉の流れを抱き止めるという、子供を迎え抱擁する母親のイメージ。この二つの時の融合は、〈夢〉と〈事実〉の混淆に連鎖しており、〈子供〉が〈past→present→future〉の〈時〉に〈母親〉が〈now/then〉の〈時〉に比されていることの記号性がありそうである。〈成長〉(widening)する〈子供〉。〈原始的〉そして〈生／死〉のイメージの〈母親〉。〈checks its passage〉というように〈*tide*〉の優位性、そして〈now/then〉の〈時〉の優位性をこのテキストは暗示しているかのようである。このように〈tense〉と〈now〉が異次元の〈時〉とすることで不整合の意識は解消される。だが、〈now〉の記号性はここにとどまらないのである。

われわれは〈now〉とテキスト 1-1 の〈テキスト相関性〉の他に、テキスト 11 との相関性をもち出さなくてはならない。

11 (without temporal force, giving various tones to sentence) I beg, I insist, I warn you, you must know, surely, etc. (*Now what do you mean by that? Oh, come now!...*)

このテキスト 1 の〈now〉とテキスト 11 の相関性は制度的読みは否認しているわけであるが、この種の〈ずらし〉(deflexion)こそ〈創造的読み〉を生成するのである。テキスト 11 で注目すべき事柄がある。〈I beg, I insist...〉と〈I〉が言表化されていることが注目される。この〈now〉と〈I〉の関連は後述

ずるとして、ここでは J.L. オースチンの〈Speech Act Theory〉との関連を問題にしておく。〈I beg, I insist...〉などの表現は、彼の〈illocutionary act〉を想起させるが、その理論は〈Reading Act Theory〉に適用可能であろうか。結論からいえば、参考にはなっても決してそのままモデルにはならない。なぜなら〈Speech Act〉の表現が示すとおり、まずそこで考えられていることは〈speak〉という行為であって、〈hear〉という行為ではない。〈読み行為〉論はむしろ〈hear〉の論に近いのである。更に〈speak〉は〈音声言語〉を前提とし、〈談話の場〉が考えられねばならない。ところが〈書記文芸〉に現象する言語は〈文字言語〉である。そこには〈話者〉〈聴者〉が構成する〈談話の場〉は成立せず、代わって現象するのは〈テキスト〉〈読者〉で成立する〈読み行為の場〉である。つまり〈言語行為〉の理論は〈現前性の形而上学〉に属するものであり、〈読み行為〉論は〈不在性の形而上学〉に属す。〈談話の場〉には〈話者〉である〈I〉が〈聴者〉の〈You〉に〈現前〉する。しかし、〈読み行為の場〉には〈I〉の記号は〈読者〉に現前しても〈話者〉は不在である。だとすると、テキスト 11 の〈I beg...〉は〈談話の場〉にしか起りえない〈now〉の意味作用かも知れない。用例を見てもそのことが明らかだろう。では〈文字言語〉としてはその意味作用は全く現象しえないのであろうか。われわれは〈I beg...〉から〈I〉が不在化した形で意味作用を起すと考える。とくに本論で考察しているテキスト 1, 2 の〈now〉はこの意味作用こそ必要である。それは〈now〉の記号の存在によって読者が文の意味解釈をするということではなく、読者の読み行為の仕方に影響を及ぼすことである。

この考えは〈locutionary act〉〈illocutionary act〉〈perlocutionary act〉に似ているかも知れない。つまり〈now〉という〈文字〉自身の〈行為〉という視点を得ればである。われわれは四つの〈now〉の相を読み行為との関連で想定する。第一の相として、インクの印跡 (type) を英語〈now〉の記号と認識することで生じるテキストの相。この〈now〉と辞典の語彙項目〈now〉と相関させて生じるテキスト相。第三に、その項目の意味作用のパラダイムから要素を選択して生じるテキスト相。読者が読み行為中に生成していくイメージの連響に影鎖を及ぼす〈now〉の相。実はテキスト 11 の〈now〉の定義はこの第四の相と関係があると思える。つまり、〈now〉のこの意味作用の項目は他の項目と並列的關係にあるのではなく、〈now〉の根源的作用であるように思える。なぜなら、〈談話の場〉ではじめて生じるあるエネルギーを表わしているからである。そのエネルギーとは〈話者〉の発話行為に〈聴者〉の意識を向けさせ



る力。その行為の内部に相手の存在を取込む力とでもいおうか。

手紙テキストと読み手が形成する〈場〉は〈談話の場〉に近いと思える。それは〈illocutionary act〉〈perlocutionary act〉が起りうるということでもある。〈明日パーティーにおいで下さい〉というテキストは、〈招待〉という〈illocutionary act〉、そして〈喜び〉という気持を読む者に対して起す〈perlocutionary act〉を行為していると考えられる。だが、即座に〈返事〉が起らない、また目的の相手に読まれない事態を考えると、明らかに談話の場とは差異がある。とはいえ、二つの場の近接は〈手紙〉では〈書き手〉が明確に判明し、〈読み手〉が特定化されているからである。そのテキストに現象する〈I〉〈you〉は固有名詞の代理である。〈読み手〉にとって〈不在〉の〈書き手〉も彼の想像の視界の内側に位置している。ところが〈書記文芸〉テキストでは〈書き手〉は〈読者〉の想像外に退いている。New Criticismのエトスでは〈書き手〉を想定しないことが制度的原則であった。だが、〈書記文芸〉に〈談話行為〉の原理を持ち込むのがそれ以前エトスであった。作家論とは〈書き手〉の〈不在〉の不安に耐えかねて、自己の想像の範囲内に〈書き手〉を位置づけようとする試みと言うことも可能である。つまり〈読み行為の場〉を〈談話の場〉にすりかえること、〈不在の形而上学〉を〈現前の形而上学〉に変換する企てといえよう。

この〈不在〉の不安に耐えて専ら〈読み行為の場〉の論理を追求するなら、〈書記文芸テキスト〉の〈now〉は〈話者〉の発話行為に〈聴者〉の意識を向けるエネルギーを内在するというのではなく、〈読者〉は〈now〉の記号によって〈話者〉ないし〈書き手〉不在のために〈テキスト〉のどこかに意識を向けると言わねばならぬことになろう。この作用は実に、〈I〉や〈this〉にも見られることである。

12 Nominative case of the personal pronoun used by a speaker or writer in referring to himself.

13 Referring to, indicating, person or thing actually present, or near to, the speaker.

テキスト12は〈I〉の意味作用の定義、テキスト13は〈this〉についてのもの。12と13のテキストを合成すると、〈I〉とは〈the speaker〉に最も近い所(nearest)に現前(present)する人物(himself)、つまり〈this speaking person〉となろう。しかし、これではまだわれわれの期待の表現にならない。テキスト

14 は 〈this〉 の別の定義であるが、この定義でわれわれの期待は充足される。

14 The (person, thing), the person or thing, close at hand or touched or pointed to or *drawn attention to* or observed by the speaker at the time (Italics mine).

12, 13, 14 の考えを合成すると〈I〉とは、〈the speaker〉が〈自己〉(himself)に〈聴き手〉の〈注意〉を引きつける記号性を有することがわかる。これが〈統語構造〉に組み込まれると〈主格〉になり、〈談話の場〉では〈話者〉の指示をすることになる。この構造内的機能の他にそれ自身の記号性として上記の作用を持つ。これが根源的記号性であろう。

〈now〉〈this〉〈I〉のこの共通した記号性は〈Presence/Absence〉の関係性の上に成立していると思われる。〈presence〉の語源〈*praesens*〉は〈*prae-*前に〉+〈*esse* ある〉+〈*-ens*〉より成立しており、〈absence〉は〈*absent-*で〈*ab-*離れて〉+〈*esse* ある〉+〈*-ent*〉となっている。〈presence〉とは〈離れてない〉、〈absence〉は〈前にない〉と同じであるから、〈Presence/Absence〉は相補的である。となれば〈now〉〈this〉〈I〉はそれぞれ〈then〉〈that〉〈he〉を対立項として前提してはざである。そしてここに〈here/there〉の対立も加えることができる。テキスト15はPODのものである。

15 In, to, this place (*h!* I am present, at roll-call; *come h.*; *look h.*, *look in this direction*, *attend to me...*)

ここに現象する〈this〉〈I〉〈present〉〈attend〉は〈here〉の記号性を十分に示している。これに対立する〈there〉のPODのテキストは16。

16 In or at that place, yonder or just come into sight or hearing, at that point, as concerns that matter, ...

〈this/that〉〈now/then〉〈here/there〉〈I/he〉をパラダイム化すると17が得られる。

17

Presence	this	now	here	I
Absence	that	then	there	he

〈this/that〉は〈指示詞〉、〈now/then〉は〈時間詞〉、〈here/there〉は〈空間詞〉、〈I/he〉は〈人称詞〉と呼ぶことができよう。この対立項の根底にあるイメージは〈Presence/Absence〉であるが、これは静的・構造的関係性である。それに対して記号受容者の意識の方向づけを行なう動的作用をも有している。この対立項の中で、〈this/that〉のパラダイムは他のものより根源的であろう。〈時間〉〈空間〉〈人称〉にも内在するからである。

かくして〈now〉の記号的存在性が確定したといえよう。〈now〉は〈Presence〉の概念が〈時間〉の相の下で現象した姿である。〈書記文芸テキスト〉では〈話者〉ないし〈書き手〉が〈不在〉のために〈now〉の〈読者〉の意識の方向づけはテキスト自身、更には〈読者〉の心に浮かんだ〈イメージ〉に対してなされるだろう。もう少し限定的に言えば、〈now〉自身を含むテキストの部分、そこから生起されるイメージ連鎖となろう。読者は〈now〉をこう読むように期待されている——〈now〉が指示する領域を意識の原点にせよ。

\* \* \*

前節でとらえた〈now〉の記号作用の実際を *The Mill on the Floss* で見ることになる。

18-1 The rush of the water, and the booming of the mill, bring a dreamy deafness, which seems to heighten the peacefulness of the scene. They are like a great curtain of sound, shutting one out from the world beyond.

このテキストは読者に二つの領域の設定を要請している。〈the rush of the water〉〈the booming of the mill〉の聴覚イメージが synecdoche となる領域と〈the scene〉〈the world beyond〉の記号が暗示する領域である。後者は〈the peacefulness〉が synecdoche となっている。前者は〈音〉の存在 (present)、後者は〈音〉の不在 (absent) が特色とされるが、この定立は逆転させられてもいる。〈音〉の充満は〈a dreamy deafness〉をもたらしている。つまりその場にいる者にとって〈音〉の不在をつくり出し、〈音〉の不在の〈a peacefulness〉がむしろ〈聞えてくる〉。客観的には前者は〈音〉の〈現前〉の場で、後者は〈不在〉の場であるが、主体が関与することによって逆の状況が起っているのである。文脈からその主体とは〈I〉であり、〈I〉の立つ Dorlcote Mill の橋の上を中心とする領域が構造的に〈here〉と意識される領域であり、

それを囲む領域が〈there〉(the world beyond)と意識される場である。この二つの領域は〈Presence〉と〈Absence〉と定立されているわけであり、その〈境界〉は〈a great curtain of sound〉。この〈境界〉に接する二つの領域のどちらにも、その優越性は与えられない。ただ〈here〉〈there〉の差異が設定されているだけである。ただ読者に〈Presence〉〈Absence〉の差異を設定させるだけである。しかし、そこにもその設定の逆転の可能性が暗示されている(deconstruction)。この二項対立の読みの構えは、〈dreamy〉に一つの記号作用を起させる。不在の記号〈real〉を想起させるのである。〈Presence〉の領域が〈dream〉と関連するなら、〈Absence〉の領域は〈real〉と関連する。しかし、このテキストから読める〈dream〉の領域の生々しさと〈real〉の領域の非現実性ほどのような記号作用を起しうるのか。〈I〉が〈夢〉の状態にあるとき、それは〈I〉にとって〈現実〉であり、客観的〈現実〉は主体にとって〈非現実〉〈幻〉かも知れない。このテキストでは〈deafness〉という〈聴覚〉の〈麻痺〉が二つの領域を連鎖させているが、この後に出てくるテキストに〈Ah, my arms are really benumbed〉という言葉表があるが、これは〈夢〉と〈現実〉を連鎖させるものであった。*The Mill on the Floss*の第1章は〈Outside Dorlcote Mill〉と題され、物語の導入部であるが、この章は現在形が使用され、物語の第2章以降は過去形である。第1章は〈夢〉とされそれ以降は〈現実〉とされる。こうした二項対立の synecdoche として 18-1 の〈dreamy〉〈real〉は作用しうる。

ここにある〈Presence〉〈Absence〉の二項対立は、第1章にのみ適用されるだけでなく、この作品全体を読むための原理である。たとえば、最終の一つ前の章〈The Last Conflict〉での〈洪水〉、そして〈Conclusion〉の〈平静〉の対立に連鎖するはずである。〈water〉の充満とその不在。〈water〉はこの作品の重要な記号となっているが、18-1の〈the rush of the water〉は〈洪水〉の synecdoche であり、その予徴とも思える。〈The Last Conflict〉に以下のテキストがある。

Maggie had no time to answer, for a new *tidal* current swept along the line of the houses, and drove both the boats out on to the wide *water*, with a force that carried them far past the meeting current of the river. (Italics mine)

The whole thing had been so rapid — so *dream-like* — that the threads

of ordinary association were broken . . .

But that could not be done at once, and Tom, looking before him, saw death *rushing* on them. Huge fragments, clinging together in fatal fellowship, made one wide mass across the stream. (*Italics mine*)

この〈洪水〉は Tom と Maggie に〈生〉の〈麻痺〉である〈死〉をもたらす。その〈生〉〈死〉の〈境界〉に〈the rush of the water〉があった。それにしても 18-1 の〈curtain〉の記号は興味深い。語源は〈cortina〉で〈仕切り〉の意味作用を起し、二つの領域の〈境界〉にふさわしく、そこに〈非業の死〉の意味作用があるといえれば Tom と Maggie の死の文脈に連鎖していることがわかる。

18-1 の最後の〈beyond〉と 18-2 の最初の〈now〉は〈Absence〉〈Presence〉の対立を成し、〈and〉がその〈仕切〉となっている。〈beyond〉の語源〈begeondan〉は〈over there〉の意味作用をし、〈now〉は〈this〉〈here〉と結びついていた。18-1 では〈Absence〉の領域と定位された〈the world beyond〉は、〈now〉を契機として 18-2 では〈Presence〉へと移行していく。〈I〉との関係で物理空間的には常に〈Absence〉(離れて存在する)と定位されるが、〈now〉の記号の存在によって〈読者〉の〈意識〉には〈Presence〉の領域となる。そして、18-1 の〈Presence〉の領域、つまり〈I〉の立つ場は〈読者〉の〈意識〉には〈Absence〉となっていく。

18-2 And now there is the thunder of the huge covered waggon coming home with sacks of grain. That honest waggoner is thinking of his dinner, getting sadly dry in the oven at this late hour; but he will not touch it till he has fed his horses — the strong, submissive, meek-eyed beasts, who, I fancy, are looking mild reproach at him from between their blinkers, that he should crack his whip at them in that awful manner, as if they needed that hint !

〈now〉によって 18-1 で構造化された読者の意識は deconstruct されて〈the world beyond〉が〈here〉になり、それに伴って〈here〉の領域は〈音〉が〈現前〉してくる。〈now〉を含むテキストが〈意識〉の原点にされたのである。この〈音〉は 18-1 の〈the rush of the water〉〈the booming of the mill〉より小さくなくてはならず、この〈音〉は 18-1 の〈音〉を〈意識〉に〈不在〉化してしまう。しかしテキストでの構造は〈that honest waggoner〉、そして

〈there〉などが示すようにこの領域は〈Absence〉である。読者は〈I〉を意識すればたちまちにしてこの領域は〈there〉となる。だが、〈現前〉化の意識が持続させられるように工夫が設定されている。〈covered〉の〈waggon〉の内部が見えるのである。〈with sacks of grain〉。そして、〈sack〉の覆いで見えないはずの〈grain〉が見える。これは〈I〉の位置からでは〈Absence〉であるべきものが、〈読者〉の意識に〈Presence〉されるのである。そして、〈that waggoner〉が〈honest〉であること、そしてその心理。更には〈his horses〉の心理が〈読者〉に〈Presence〉される。この〈意識〉の原点を構造的に〈Absence〉の部分に位置づける過程によって、〈that honest waggoner is thinking...〉はその〈waggoner〉の意識の流れとさえ読まれてくる——〈My dinner is getting sadly dry in the oven at *this* late hour; but *I* shall not touch it till *I* have fed *my* horses.〉構造的には〈Absence〉の〈home〉が〈Presence〉され〈未来〉が〈現在〉化される。このように構造的に不自然な事柄も〈now〉の記号の作用によって〈自然〉な事柄になる。この読みの構えは更にテキストに不在化された意味作用を現前化させるだろう。たとえばこの waggon はどこから来て home へ向うのか。このことはテキストに言表化されていない。しかし、18-1の〈the mill〉の記号と〈the sacks of grain〉の連鎖はそれに解を与える。〈coming home〉〈dry〉〈at this late hour〉は〈crack his whip at them in that awful manner〉の準備をしており、これらの記号連鎖から〈the waggoner〉が〈急いでいる〉ことを現前化する。また、〈dry〉からは〈the waggoner〉〈his horses〉の〈渴ぎ〉が現前化され、この読みがあればこそ18-4の〈his horses〉が〈dipping their eager nostrils into the muddy pond〉する情景が活々とイメージ化されるのである。

〈I fancy〉や〈as if〉の構造的記号連鎖は、確かに〈Presence〉〈Absence〉の絶対的領域を主張はしている。しかし、〈Absence〉を〈Presence〉に変える読みの構えはその記号の〈Presence〉を〈Absence〉化してしまうだろう。〈his horses〉は確かに〈事実〉として〈looking mild reproach〉をしていると意識される。そして〈he should... as if they needed that hint!〉を〈he should crack his whip at us in this awful manner, as if we needed this hint!〉と読ませさえしよう。そして〈hint〉の〈不在〉の内容、〈hurry〉を現前化する。もちろん構造的には〈I〉の感情表現とされるわけであるが、〈急げという合図が必要かのように、あんなにひどくピシピシとムチを揮って〉、〈普通なら strong, submissive, meek-eyed な馬もちょっと非難の顔付をしている〉。ここ

にも実に〈Presence〉〈Absence〉の対立はある。〈通常〉と〈異常〉。つまり、〈通常〉が〈Absence〉化され〈異常〉が〈Presence〉化されている。このことも〈hurry〉の〈現前〉化に機能しているだろう。

〈I fancy〉の〈I〉はその立っている領域を〈Presence〉にせよという作用ではなく、〈now〉と同様〈I〉を含むテキストを〈Presence〉にせよという記号作用をも起している。つまり、〈馬〉の心理。したがってこの時〈馬〉の外見、及び〈the waggoner〉〈the waggon〉は〈読者〉の意識に〈不在〉化されている。そこで18-3の命令形が現象するのである。

18-3 See how they stretch their shoulders up the slope towards the bridge, with all the more energy because they are so near home. Look at their grand shaggy feet that seem to grasp the firm earth, at the patient strength of their necks bowed under their heavy collar, at the mighty muscles of their struggling haunches !

〈音声言語〉での〈命令形〉は〈現前〉する〈I〉と〈You〉によって、及び指示対象によって知覚を作動させようが、〈文字言語〉ではそうした項目は〈不在〉であるために〈想像力〉を作動する。それは〈不在〉の〈現前〉化に意識を向けさせる事である。つまり、文字言語での命令形は〈referentiality〉ではなくて〈productivity〉を記号化したものとなる。そして、〈See here !〉〈Look here !〉の言表のもつ相手の注意を喚起するという〈now〉の作用をも起していると思える。とすれば18-3の命令形は、18-2で意識に構造化された〈馬〉の心理を〈Presence〉、外見を〈Absence〉にする意識構造を deconstruct する。〈馬〉の外見こそが18-3では〈Presence〉とされるのである。その〈境界〉に〈See !〉〈Look !〉が記号として現象しているわけである。構造的には、〈with all the more energy because they are so near home〉は〈I〉を〈Presence〉にした〈馬〉の〈Absence〉の心理の〈現前〉化であるが、〈馬〉の外見を〈原点〉に据える意識には〈馬〉の〈精一杯に坂を登る〉様子を強調する記号作用を行なうことになるだろう。

〈they stretch their shoulders〉の記号連鎖は〈馬〉の動きのイメージを喚起するだけではない。表層テキストに〈Absence〉である事柄の記号となり、それを〈Presence〉する。それはこの〈馬〉の動きと〈crack his whip〉の関係である。われわれは〈crack his whip〉を〈急げ〉の〈hint〉と読んでいたが、そこにもう一つの〈hint〉を読まなくてはならない。〈馬〉と〈馬車〉が〈the

slope towards the bridge) にさしかかったことである。その〈slope〉は〈登坂〉か〈降坂〉か。この表層テキストに〈Absence〉のイメージは〈馬〉の動きと〈ムチ〉の使用から想像されるが、〈slope〉の音の/slou(p)/から〈slow〉が〈Presence〉して補強されるであろう。これら〈Absence〉のイメージが〈Presence〉化される過程は〈馬〉についてのイメージが、〈shoulders〉→〈feet〉→〈necks〉→〈haunches〉と移行し、これら〈部分〉が〈Presence〉し、そのために〈全体〉が〈Absence〉になるという関係性、つまり〈synecdoche〉によって常に表層テキストに〈Absence〉の〈horses〉が意識されるのと軌を一にしている。この意識の転移はゲシュタルトの〈地と図〉の関係でもある。〈意識の転移〉といえはここにある〈firm〉〈patient〉を〈転移修飾語〉として読むことによって、表層テキストに〈Absence〉の言表が生じてくる。〈grasp the firm earth〉は〈firmly grasp the earth〉、〈the patient strength of their necks bowed〉は〈the strength of their necks patiently bowed〉、更に〈their strong necks patiently bowed〉。この転移の変種として、記号連鎖の中で一度〈Absence〉化されたものが姿を変えて〈Presence〉化する例が見られる。〈See〉/〈Look〉, 〈they〉/〈their〉, 〈slope〉/〈earth〉, そして〈patient〉/〈struggle〉, 〈neck〉/〈collar〉, 〈strength〉/〈mighty〉。とくに、〈patient〉は〈patientia〉(苦しむこと)を語源にしたから〈struggle〉と連鎖し、〈collar〉は〈collār〉で〈collum〉(首)+〈-āre〉=〈首に属するもの〉だからである。これらは〈metonymy〉と呼んでさしつかえないだろう。

18-4 I should like well to hear them neigh over their hardly-earned feed of corn, and see them, with their moist necks freed from the harness, dipping their eager nostrils into the muddy pond.

ここに構造化される意識は〈I〉の領域、その心理である。しかし、〈読み行為〉の過程では〈I〉は〈now〉〈here〉〈See〉などと同じ働きをし、ここに述べられる事柄を意識の原点に据えさせる。この事態は〈時間〉の立場からは〈I〉の領域を含む〈now〉(at this late hour)ではなく、そこに〈Absence〉の〈時〉、つまり〈未来〉である。その〈Absence〉の〈時〉が〈Presence〉化されてくる。その時の意識にとって〈hear〉は18-3の〈See〉〈Look〉に似た機能を果たすることになる。〈Hear them neigh over their hardly-earned feed of corn.〉そして〈See them, with their moist necks freed from the harness, dipping their eager nostrils into the muddy pond〉。〈neigh〉の行動はsynecdoche



であり、われわれの想像力は表層テキストに〈不在〉の〈馬〉の動作、そして〈their feed of corn〉を〈食る〉イメージを〈現前〉させる。そしてそれはまた〈the waggoner〉の〈hardly-earned〉〈dinner〉をも〈現前〉化するかも知れない。〈hardly-earned〉は18-3の〈馬〉の激しい労働と連鎖するが、それは〈neigh〉の激しさも〈現前〉化する。それは〈hardly〉が〈転移〉されて〈neigh〉と連鎖されるからである。またこの表層テキストは不在の〈馬〉の〈気持〉をも現前化する。〈ああ、やっとありついた〉という歓喜。したがって、〈hear〉とは単に〈聴覚〉の使用を刺激する記号ではなく、synecdocheの連鎖によって〈視覚〉をも刺激するのである。つまり、読者の意識をある方向に向ける作用をもつわけである。そういえば〈see〉も同様に〈視覚〉だけでなくsynecdocheの連鎖から〈聴覚〉をも徴用する。たとえば〈dip〉に伴う〈音〉。また〈鼻息〉の〈音〉。synecdoche といえば〈freed from the harness〉とはイメージとして〈現前〉するものは〈馬具がはずされる〉ことであるが、18-5の表層テキストに不在の言表である〈労働からの解放〉の意味が現前化されよう。〈in harness〉は〈いつもの仕事に従事して〉の意味作用があるからなおさらである。〈moist〉は〈sweat〉のmetonymy。〈their eager nostrils〉の〈eager〉は〈転移修飾語〉だから、〈dipping eagerly their nostrils〉と不在の言表が現前化されるが、同時にその意識は〈the muddy pond〉の〈muddy〉をも〈転移〉させ〈their muddy nostrils〉の言表を現前化するかもしれない。この〈mud〉は〈労働〉の〈痕跡〉となろう。

こうした〈未来〉の事態の〈現前〉化の次に〈now〉が配置されていて、〈読者〉の意識の構造は deconstruct され次の構造化へと進む。

18-5 Now they are on the bridge, and down they go again at a swifter pace, and the arch of the covered waggon disappears at the turning behind the trees.

18-1で構造化された〈I〉を意識の原点にする〈Presence〉の領域に対して、18-5で構造化される領域は〈I〉に〈Absence〉な領域に違いないが、〈I〉に〈現前〉する〈there〉ととらえられる。しかし、〈読者〉の意識にとっては〈now〉によってこの領域が原点とされている。〈I〉の領域こそ〈不在〉である。〈bridge〉にいるから、18-3の〈slope〉は不在化されており、そのために〈again〉の記号によって表層テキストに不在の〈slope〉が意識に現前化する。この〈slope〉の意識化がないかぎり、〈down〉〈at a swifter pace〉は生きて

こない。この比較級の記号は、〈馬〉+〈馬車〉の橋の上でのスピードが下り坂のそれより遅いことを示しているのかも知れない。つまり、橋上では慎重に馬を馱しているとも読める。〈bridge〉の姿は表層テキストに不在であるが、〈arch〉の記号に刺激されて〈arch〉形をしているとイメージ化されそうである。〈the arch〉が〈消える〉という表現は〈synecdoche〉による。しかし、〈at the turning〉で消えそうになる時、その幌馬車の後姿の〈アーチ形〉が印象的である。その最後のイメージの後にパラグラフが変わり〈Now I can turn my eyes towards the mill again and watch the unresting wheel sending out its diamond jets of water.〉が現象する。明らかに〈now〉が〈意識〉の転換、構造化された意識を deconstruct する作用をすることがわかってる。

18-1 から 18-5 は 5つのパラグラフで構成されている〈Chapter 1〉の第三番目のパラグラフであったが、これまで示した読み行為の流れを〈Presence/Absence〉〈this/that〉〈I/he〉〈now/then〉〈here/there〉の二項対立で再構築してみる。これらの項目は誰かの〈意識〉を〈原点〉にした相対的なものであるから、まずはその原点の定位をしなくてはならない。表層テキストによって構造化された空間・時間の関係の原点は〈I〉である。その〈I〉にとっての〈Presence〉の領域は〈I〉の立つ橋の上を中心とする領域で、〈Absence〉とはそれ以外の領域となるが、〈Absence〉とは〈離れて存在すること〉であるから、その〈離れ〉が問題となる。〈I〉の〈感覚〉で捉えることの可能域と不可能域とが考えられる。前者を仮りに〈Absence 1〉とし、後者を〈Absence 2〉としておく。すると 18-1 から 18-5 は大きな枠組として視覚的意識にとらえられる〈Presence〉と〈Absence 1〉、そしてその視覚的意識にはとらえられない領域、つまり想像的意識〈Absence 2〉から成る。〈Presence〉域は〈I〉の立つ Dorlcote Mill あたり (here)、〈Absence 1〉は〈that waggoner〉 (he) が〈the horses〉 (they) を走らせる域 (there) である。〈Absence 2〉は〈that waggoner〉〈the horses〉が〈at the turning〉で消えていく所である (behind the trees)。そこには〈home〉が含まれるし、また〈that waggoner〉や〈the horses〉の心の内部もその一部と考えられる。〈here〉は〈the rush of the water〉〈the booming of the mill〉の〈音〉の支配する領域、〈there〉は〈here〉を囲む〈the scene〉〈the world beyond〉。そこは〈peacefulness〉が支配的である。突然〈the thunder of the waggoner〉が起り、〈peacefulness〉は破壊される。この〈here〉と〈there〉を〈仕切〉るのが〈a curtain of sound〉。そして〈here〉と〈there〉の領域、つまり〈Presence〉と〈Absence 1〉、そ

して〈Absence 2〉を〈仕切〉るのが〈trees〉とされている。この〈仕切〉は他にも設定され、表面と内面の〈仕切〉。更に〈the waggon〉の〈おおい〉、〈sack〉。こうした物質的〈仕切〉の他に概念的〈仕切〉とでもいうべき〈現在〉と〈未来〉の〈仕切〉。〈見え〉と〈想像〉の〈仕切〉なども考えられる。この〈仕切〉が表層のテキストで記号化されて、〈now〉や〈See〉〈Look〉、〈I〉となっている。

以上の静的意識構造が、〈読み行為〉においてどのように現象するのか。われわれは意識の原点を指示するのに〈now〉を使っておく。そして各表層テキストの領域を以下のように名付けておく——〈now 1〉(18-1), 〈now 2〉(18-2), 〈now 3〉(18-3), 〈now 4〉(18-4), 〈now 5〉(18-5)。〈now 1〉では意識は〈here〉が支配的であるが〈there〉に移行しつつある。〈音〉の〈現前〉から〈不在〉へと移行せんとしている。その移行の薄明は〈And now〉で完結する。〈now 2〉では〈now 1〉で〈there〉と構造化された部分が意識の原点になる。〈音〉が再度〈現前〉するが、異質のものである。すると、〈now 1〉で〈現前〉した〈音〉は〈now 2〉の意識には〈不在〉化する。〈now 1〉の〈here〉の意識は破壊されて〈now 2〉では別の〈here〉意識が成立する。〈now 2〉を原点にすれば〈now 1〉の〈now〉意識は〈then〉意識になる。〈now 2〉ではまず〈the waggoner〉が〈現前〉し、その外面的イメージは〈think〉の記号によりたちまち〈不在〉化され、内面的意識が生じてくる。この〈外〉→〈内〉の移行は〈the horses〉にも適用される。〈the horses〉の内面への意識。ここが〈now〉〈here〉とされていると、〈!〉の記号の次に〈See〉の記号が現象し、その意識は破壊される。〈now 3〉では〈the horses〉の外面的イメージが強烈に〈現前〉化してくる。しかし、所々で内面化のベクトルは生じるものの全体の流れは外面的ベクトルが支配的である。またも〈!〉(注意を喚起する記号)が現われ構造化された意識は破壊される。その次に〈I〉の記号が起る。〈now 4〉は一瞬間〈now 1〉の〈here〉の位置に意識の原点が移るようになるが、たちまち〈Absence 2〉へと移る。〈now 1〉で構造化されている〈時間〉における〈不在〉領域(then: 過去・未来の両方に使用される)が〈now 3〉では〈now〉とされる。〈now 4〉の〈now〉意識は〈now 5〉の最初に現われる記号〈Now〉によって〈不在〉化され〈now 2〉の構造的〈now〉が現われてくる。〈the waggoner〉〈the horses〉〈the waggon〉などの〈Absent 1〉の領域のイメージが現前化するが、それも〈Absent 2〉の領域へと〈不在〉化していく。

以上の〈now 1〉から〈now 5〉の領域は、継起して並列されるとイメージ化

することができる。〈now 1〉→…→〈now 5〉の継起は、実際視点をずらせば〈then 1〉→…→〈then 5〉の継起でもある。読者の意識の原点が〈now 1〉から〈now 2〉へと移行する過程で〈now 1〉は〈then 1〉とされざるをえないからだ。ここに表現された〈now〉〈then〉は〈流れる時間〉に組み込まれたものではなく、人間の〈now〉と〈then〉の意識に基づくものである。計量的に〈now 1〉と〈now 2〉には差異はあるかもしれない。しかし、ここで意識されるそれぞれの領域の時間は〈クロノスの時間〉ではない。認識主体の〈内的時間〉と関係がある。〈now 1〉の〈時〉はそこで完結しており、〈now 2〉とは異質である。この〈now〉の連鎖、つまり不連続の継起こそ〈textの時間〉を構成すると思える。

この不連続の領域を連鎖させるものは、イメージの類似である。〈now 1〉→〈now 2〉では〈音〉、〈now 2〉→〈now 3〉は〈馬〉、〈now 3〉→〈now 4〉は〈馬〉、〈now 4〉→〈now 5〉は〈馬〉。〈now 1〉→〈now 2〉の〈音〉は質と量が変化している。その点でその関係性を〈metonymy〉(change of name)と呼ぶことができるかも知れない。〈now 2〉→〈now 3〉で〈馬〉の全体から一部へと意識が移るから、その関係を〈synecdoche〉(receive joiningly)と呼べるかも知れない。〈now 3〉→〈now 4〉は同じ〈馬〉の行為という点から見れば〈metonymy〉関係にあることになり、〈now 4〉→〈now 5〉も同じようにとらえられよう。その他の詳細な読みは既に行ない、そこにも〈metonymy〉〈synecdoche〉の現象は見られた。おそらく〈読み行為〉のプロセスは〈Presence〉〈Absence〉のリズムとともにこうした〈tropology〉が関与して不連続の継起の感覚を生んでいられると思われる。かくして〈text〉の〈時間〉は〈流れる〉のではなく〈構成・配列〉されている、という命題が得られよう。